
大東亜決戦

田端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大東亜決戦

【Nコード】

N6728H

【作者名】

田端

【あらすじ】

現代人草加徹（21）は交通事故で死亡…と思われたが目が覚めたら連合艦隊旗艦「三笠」にいた。以後、帝国軍人として生き中將まで登りつめるがいよいよ太平洋戦争が近づいてきた。少しはマシな負け方をすべく、草加は立ち上がった。

プロローグ（前書き）

注意 -

- 1・艦魂…といってもあまり活躍しない（兵器の性能が上がる程度）
- 2・本作は特に序盤、「紺碧の艦隊」に影響されている
- 3・草加徹中將は架空の人物です
- 4・作者は決して反米主義者ではありません
- 5・実は陸軍好きな作者な為、間違いまくつてると
思いますので発見された方はご指摘してくださいと
今後書くのに参考になるので嬉しいです。
- 6・イギリスが日本に寝返るなどのもんでも展開アリ
- 7・執筆速度は八号に異世界に劣ります
- 8・戦争賛美だ！と批判されに来たお方
- 9・海軍ものなのに陸軍しか出ない回があるかも

以上の事が許されない方は

あまり観覧をオススメできません

追記・ヤバい部分を削除

プロローグ

2009年 -

ガシャーン！

・
・
・

なんとということだろうか

ミリタリー馬鹿であり主役である草加徹は

航空自衛隊の航空祭の帰り、車を運転していたら

事故って死んでしまった、しかも今回が彼女との初デートであった

享年…21

彼は、1人息子であった

それだけに親は大変悲しんだ

彼女は幸いにも重傷を負っただけで住んだが彼氏の死を大いに悲しんだ

彼は二度と目を覚ますことのない屍と化した…善だった…

「…」

「草加少尉候補生！お目覚めでありますか！？」

少尉候補生？

まず、状況の整理から行うべきだ

まず徹は、たなる民間人であり
軍人ではない、そして、現行憲法では
軍隊をもてないので少尉という階級はない
さらに、もし自分が生きているなら
こんな部屋にいるはずがない

「ここは？」

徹は場所を訊いてみた

「ここは旗艦、三笠の艦上であります」

「草加殿は負傷されたのでご存知ではないでしょう…」

我が連合艦隊はロシアバルチック艦隊に圧倒的勝利をしました！」

「三笠…連合艦隊…バルチック…」

ミリタリーにやたらと詳しい徹にはすぐにわかった
わかりたくもない、実際そんな現象があつたらいろいろとおかしい
だが…この状況を見るかぎり、そうなたに違いない

自分は、明治三八年五月二八日、日露戦争の決戦とも
言える日本海海戦終了後にきてしまった

…というよりも、転生したと言ったほうが正しいかもしれない

(俺の今の年齢は21…すると開戦時57…いい歳だな)

(うまく行けば将官だろう)

(ん?…もしや俺は山本五十六と同年ぐらいか?)

そういえば、日露戦争には少尉候補生として山本五十六が参戦
日進艦上にて負傷した…

(似ている…)

その後、徹は海軍軍人として生きた
1938年、この時私は海軍中将だった、歳もとつた
米内光政、山本五十六、井上成美などの海軍軍人とも面識があつた
すでに日中戦争が始まっている、あと一年で第二次世界大戦が
そして3年後には太平洋戦争が始まる

1939年 -

「やあ、草加中将、久しぶりですな」

山本五十六が草加中将を訪れた

「そちらこそ、連合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官就任、おめで
とうございます」

「いやいや、ほめられるほどでもありません」

「それより、いよいよ第二次世界大戦が始まってしまいましたな」

久々に会った二人、だが、この時すでに

ナチス・ドイツがポーランドへ侵攻

イギリス・フランス軍が宣戦布告

第二次世界大戦が始まっていた

「タイムリミットは残り2年ですな」

「ええ」

山本は、草加にいろいろと話を聞いた

最初は胡散臭いと思っていた

だが彼の言ったことはすでにおこっていた

それも、草加の言ったことはすべてであった

この事は、山本を通して同志へ伝えられていた

なんとしてでも戦争を回避すべくこつそりと、工作を行ってた

さらに、後世とも言えるこの世界には変わったものも存在していた

主に艦艇などに宿る魂

言わば艦魂というものだ

それぞれの兵器によって性格が違う

大艦巨砲主義者もいれば、これからの戦いは航空機が大きな鍵を握る、と主張するものなど

「その前に、ドイツとの同盟を避けなければ

あの独裁者と手を結んだら世界中を敵に回す事になる」

だが、草加、山本らの願いかなわず

1940年日独伊三国軍事同盟が結ばれさらに東條内閣も発足しようとしていた

だが、そんな時、すべてを知った山本ら、すべてを知っている草加は工作を働き

総理はまた、草加からすべてを知らされた米内となった

海軍の首相など陸軍は納得いかない、反乱を起こそうとするも

すべてを知らされ、陸相となった東條は今後を恐れ、反乱を止めさ

せた

ここより、ちよつと歴史がかわつた

開戦反対派も草加が起こつた事の実態を説明

この時、数多くの出来事を当てた草加を信用しないものはほとんど
いなかった

日本に勝ち目がないのは誰もがわかつていた、しかし、草加の目指
すものは勝利ではなく

本土大空襲、原爆投下など、悲惨な負け方ではなくすこしでもマシ
な負け方を目指した

これより、転生者、草加徹中将与彼から知らされた歴史を知つたそ
の他陸海軍の仲間による

新たな決戦が始まるうとしていた

プロローグ（後書き）

次回予告 -

「やあ！本日登場してないけど私は
戦艦日向だよ！」

「そもそも日向が活躍するか微妙で…」

「ひどいわ！だいたい陸軍、特にドイツ陸軍好きなの
になんで海軍ものの小説書くのよ？」

「たまには海軍もいいかと思って」

「日本のような国家は陸軍よりも海軍のほうが重視される
それは地理的にもあたりまえの事でしょっね」

「ふ〜ん、まあいいわ、とりあえず日本海軍が
主役つてだけで安心したわ私」

「日本陸軍も活躍しますか？^^」

「え？ダメよ、戦車弱いし思想古いし」

「日向…日本陸軍をナメるなよ…」

そんなわけで次回は 日本軍主要装備
どうか、ご期待ください

一・日本軍主要装備（前書き）

チートな気がしますが

これでも後々日本軍は苦戦します

一・日本軍主要装備

早くも開戦が決定した日本
しかし、今度は違った
歴史を知るものがいた

いつ何が起こったかわかるもの…彼1人だったが
今や山本長官をはじめとする陸海軍軍人の一部という同志をもつ

11月1日、突如御前会議が行われた

「そうですね、戦争を行うにあたり、兵器が必要ですね」

現在日本には、開戦時にあった艦艇すべて
そして、思いもよらぬ仲間、戦後小規模ながら飛行機製造会社の社長を務めていた
高杉という男、さらにすべてを知った皆の方針で航空兵力を増強
今主力となっている零式艦上戦闘機二一型は最初からある程度の防弾がなされ
しかも発動機となった「栄二一型改」は小型軽量ながら1200馬力ほど出た

両翼に125発の20mm機銃の信頼度も上昇
航続距離、運動性能は二一型のまま、ただし上昇力が上がり最高速度も

高度6000mで565km/hを記録、降下制限速度も最初から
740.8km/hであった

ただし、すでに新型艦上戦闘機が開発中、1942年には実戦に配備できるという

これは、格闘戦の時代から高速を生かした一撃離脱へ移り変わるうと
している事を知っていた草加が開発を指示したからであろう
軍でも、そういうふうに教育するよう、すでに指示されている

一方陸軍はどうだろうか？

九七式戦闘機の超越した運動性能に影響され
陸軍はずっと、格闘戦での実力が高い戦闘機の開発を要求した
その結果、キ-43『隼』の正式採用が遅れた

本世界でもそうである

陸軍はその思想から抜け出すことが出来なかった
ただし根本的な性能は上昇していた

最初から三型があるようなものである

560km/hと零戦と比べて多少劣る程度まで最高速度が上昇
問題とされていた運動性能も九七戦よりは少々下であったが航続距
離、速度ともに
文句がなかった、また海軍の零戦よりも上昇力・運動性が優越した
機体であった

ただし、戦闘機の性能が上がっても
他機種はどうだろうか？

九七式艦上攻撃機および九九式艦上爆撃機の性能は変わらなかった
陸軍機も爆撃機等の航空機の性能はあまりかわらなかった
ただし、早いうちから研究が進んでいる超爆撃機もあった

それは、草加の前世では戦局悪化により没となった『富嶽』であった

すでに発動機は完成し機体の製作もほぼ完了している
少なくとも見積もって1942年8月には実戦投入できるという

また、戦争中に登場した近接信管

そのほかイギリスで有効性が実証された
レーダーの開発なども行われていた

そのうちの近接信管はすでに実用済みで
帝国海軍艦艇の多くに装備された

また、日本海軍が総力を挙げ、日露戦争前に
発見した新たな魂「艦魂」によつて日本海軍艦艇は
性能的に劣つたとしても、連合軍のどの艦艇よりも命中精度が高か
つた

なお、たまたまだが東條にも見えるという
今回の米内内閣は艦艇の艦魂及び飛行機の飛魂がみえる者のみで編
成されている

一方で機甲師団の実力は改善の方向へ向かっていた
1939年のノモンハン事件では前世以上の痛感を味わい、これが
影響してか

機甲師団の実力を根本的に改める身構えだった

こうして、新たな戦車が生まれた

前面50mm 側面25mm 後面20mm、速度45km/h
行動距離220km

一〇〇式47mm戦車砲を搭載した新型中戦車『一〇〇式中戦車』は
アメリカ陸軍M3軽戦車に十分対抗できる性能をもっていた

(リベットは廃止され溶接となった)

またチハの改良型も開発され、多少の改善は行われた
それでも列強の戦車と比べると弱体であるのは否定できない
車魂たるものは存在しない、だが搭乗員の練度は高いので
命中率は非常に高い

さらに歴史を知る人物がいる
日本軍の準備は完全とまでは言えないが進んでいた
日本は開戦予定日を史実どおり12月8日とした

一方アメリカでは -

「ジャップを戦争に引き込めば
正義のアメリカが世界の大塔の頂点に登れる」

「その為の開戦でありますな」

「ああ、その為に今、私は交渉文書を作成中です」

いわば、ハルノート作成が進んでいた
日本はこれをとどくのを待っていた
戦後、侵略国家扱いされ、国民自身自虐していた日本
そうならないためにもこの場を利用し、大日本帝国の真の目的を伝
えるのであった

一・日本軍主要装備（後書き）

次回予告 -

「田端さん、始めまして、私長門ともうします」

突如現れたのは艦魂「長門」

その名の通り戦艦長門の艦魂だ

「あの、主要装備紹介だというのに艦艇の名前が
でていないとはどういうことですか？」

「それは…艦艇は赤城やら加賀やら名前が多すぎて
超長くなるからですよ」

「なら航空機や戦車などの無駄な兵器を排除すればいい」

長門は大艦巨砲主義者だった
しかも陸軍嫌いである

「真珠湾攻撃やマレー沖海戦は航空機の戦果だし
大和沈めたの航空機ですぜ長門？」

「しかも日本の戦車はすくなくともT-26やBT快速戦車
とは戦えるぞ」

「似たような性能だからでしょ、やっぱり存在感が
あってしかも強いのは戦艦よ」

「さあ？どうなのやらね？」

次回、「ハル・ノート」日英仏三国同盟
とんでもですがどうか、ご期待ください

二・ハル・ノートと日英仏三国同盟

来たる11月26日、事実上の最終通牒である『ハル・ノート』がアメリカ側から大日本帝国へ提示された

1・アメリカと日本は、英中日蘭蘇泰米間の包括的な不可侵条約を提案する

2・日本の仏印からの即時撤兵

3・日本の中国からの即時撤兵

4・日米がアメリカの支援する中国国民党政府以外を認めない

5・日本の中国大陸における海外租界と関連権益を含む治外法権の放棄について諸国の同意を得るための両国の努力

6・通商条約再締結のための交渉の開始

7・アメリカによる日本の資産凍結を解除、日本によるアメリカ資産の凍結の解除

8・円ドル為替レート安定に関する協定締結と通貨基金の設立

9・第三国との太平洋地域における平和維持に反する協定の廃棄

10・本協定内容の両国による推進

ドン！

この内容に草加は思わず
怒りを感じ机を叩いた

「これほどひどいものだとは…私も一応全文読みました
しかし生でみるとこれほどひどいものとは…」

「草加中将、我々の方針はすでに決まっております」

「そうですね、長官」

「長官のお望みどおり短期決戦、もし負けたとしても
悲惨な負け方はせず、やってみせましょう」

「ええ」

その後草加の話により米内首相は
電報をアメリカに送るよう命令した

その内容は受託条件、反した場合の開戦であつた
なお、開戦理由にはアジア解放と記されている

これは現在米国の植民地となっている島々を解放するためであつた

「…大統領」

「…返答する必要はない、日本に

先制攻撃をさせ、欧州戦線介入の機会をえるのだ」

「日本との戦争はおまけにすぎない」

だが、ルーズベルト大統領は
密かに日本を恐れていた

(米内：といったか、以前も総理を務めていたな

だがあの時とは違う…)とんでもない強者と化している)

(もしかすれば…本当にもしかすればだが…

大日本帝国は我々が思っているより…手ごわい！)

この時、日本の恐ろしさに気がつき始めていたのは
ルーズベルト大統領のみであった

一方、ナチス・ドイツ -

「総統！」

「なんだね？」

「もうご存知でしょう」

現在同盟中である大日本帝国は反ナチスが内閣総理大臣になった
ことにより

とても我が国に反感をもっております」

「…まあよい、日本軍とはいずれ戦う気だ」

そんな野心を燃やすヒトラー

それに恐れるイギリス・フランスは実はよろこんでいた

そう、日本に反独政権ができたことにイギリス、フランスは喜ぶ

またかつての立場をアメリカに横取りされそうなイギリスは大日本
帝国とアメリカの対立も

喜んだ、イギリス、フランスは、極秘で日本に公使を送った、12月1日の事であった

「なに？イギリスとフランスの公使が？」

米内はたまげた

もはや敵対勢力となりつつあったイギリス

おまけにフランスの公使まで、わざわざ大日本帝国まできたのであった

「…というわけでありまして、我がイギリスはドイツから攻められるであろうし

急速に国力をあげるアメリカに地位を奪われるわけにもいかない」

イギリスは、日英同盟を復活させたい方針であった

イギリスが手に入れた情報は反ドイツだけではなく

いつのまにか手に入れた高度な科学力、これがほしかったのである
フランスも同様であった

イギリス・フランスは国力が落ちてしまった日本を気にしてか同盟条件を和らげた

日本は技術提供の変わりにイギリスの東洋の兵力、基地、資源などを提供するという

12月5日、日英仏三国同盟が結ばれ逆に日独伊三国同盟をなかつたことにしたのである

この事は全国へ流された

日本は無血で多くの資源を手に入れた

また日本は同時に情報提供を行った

ドイツ軍の進撃ルートをイギリス・フランス軍に教えたのであった

ただしフランス軍は自由フランス軍である
進撃ルートとはアフリカだったりソビエトだったりということである

もちろんこの情報はアメリカにも渡った

「なんてことだ…イギリスとフランスが裏切りやがった…」

「大統領…」

「アメリカの正義に恥ずる出来事だ、今はイギリスを支援してやろう
しかしこの戦いが終わり我が国の国力が回復した所で英仏に宣戦
布告

正義の鉄拳を食らわせてやるうではないか？」

その頃、南雲機動部隊と陸軍揚陸艦は
真珠湾目掛けて近づいていた、日本軍はハワイを完全攻略するとい
うのだ

二・ハル・ノート〜日英仏三国同盟（後書き）

次回予告 -

「長官！日独伊同盟とりやめて日英仏とはなんで？」

「いくらなんでも滅茶苦茶すぎでは？」

山本長官に迫るのは通りすがりの通行人Aであつた

「まあよいではないか、所詮は小説だ」

「長官、それ大変失礼だと思えますよ」

「そもそもイギリスはともかくフランスは使えるんですか？」

「すくなくともイタリアよりは使えるはずだ」

「長官…ひどいです」

ちなみにフランス…といっても自由フランス軍である
進撃ルートといつてもすでにフランスは占領されている

次回、真珠湾奇襲 上

ひどい小説ではありますがご期待ください。

三・真珠湾奇襲 上

その頃、ハワイ攻略を目指し

南雲機動部隊と陸軍揚陸艦はハワイ目掛けて航海していた

本日は運命の12月8日、機動部隊は真珠湾の北方360キロの地点に潜入していた

赤城、艦橋 -

「長官、出撃準備が完了しました」

空母「赤城」飛行隊長、淵田美津雄中佐が

南雲中将へ報告した

さらにそこへ草鹿龍之介少将がやってきた

「最後の情報が入った。真珠湾に在泊の艦、下の如し。戦艦9、乙巡3、水上機母艦3、

駆逐艦17、空母及び甲巡は全部出動したり。艦隊に異常の空気を認めず」

「空母はいないのか？」

「山本長官によれば、本日中にかえると」

「うむ、そうか」

その後、草鹿参謀長が叫んだ

「よし！行け！」

バ…バババ…

航空機にエンジンがかかる

早朝、第1次攻撃隊の第1波が飛び立った

作戦参加機は零戦二一型、九七艦攻、九九艦爆である

赤城艦橋 -

「長官」

「なんだ？赤城か」

赤城…名前どおり赤城の艦魂である

見た目は十代中頃、なお他の空母仲間と同じく大和などの戦艦グループとは

仲が悪い、彼女たち空母グループはこれからの戦いの決めては航空機だと

思っているが戦艦グループは大艦巨砲主義であった

「いよいよ、来ちゃったね」

「後戻りはできない、連合艦隊司令長官の言う通りにやれば

なんとかなるだろう」

「あとは、兵士達の戦いぶりです」

第一次攻撃隊1波 -

「見ろ！軍艦旗だ！」

攻撃隊の一員が
朝日に指をさした

「おお!!」

「まるで我々の勝利を見守るかのようですね!」

<九七式艦攻 機内>

「オアフ島です!」

偵察員が雲の谷間から見えるオアフ島を発見した
すぐに他機へも報告された

淵田総隊長は命令した

「よし突撃だ! 攻撃開始!」

隊長機はト連送(全軍突撃せよの略伝)を発信する

一方、連合艦隊旗艦「長門」

赤城、艦橋

「隊長機のトトトをを傍受しました」

「トトトがきましたか」

「うむ」

「いよいよだね」

「がんばってくれ、我が兵士」

一方、連合艦隊旗艦『長門』 -

「長官、隊長機の突撃信号を直接傍受しました」

「長官」

「…本当であります…」

「やったああ！！奇襲成功だあ！！」

長門乗組員一同は

歓喜した、一方艦魂長門も山本長官へ語りかけた

「やりましたね、五十六」

生意気に五十六と呼ぶ長門

20代前半のお姉さんタイプだ

「よし、全地域で速やかに戦闘開始」

かくして太平洋戦争の火蓋は切って落とされた

一方、攻撃隊は -

「敵の迎撃機がありませんな」

「どういふことでしょうか？」

「それにこのあたりは高射砲陣地のはずだが
まったく撃ってきませんな」

「これは…完璧に奇襲成功ですな」

「隊長！真珠湾です！」

「よし！攻撃開始！」

日本海軍、総力をあげての

「真珠湾攻撃」が始まった…

三・真珠湾奇襲 上（後書き）

次回予告 -

「いよいよ開戦ですね」

「でも航空機の性能が前世と比べてもあまり大差ないみたいですが大丈夫なんですか？」

心配そうに語るのは赤城であつた

彼女は機動部隊の航空機同士のみによる海戦がこれからの海戦だと思っている1人であつた

「さあ？開発は行われていますが

配備は1942年になつたららしい」

「ぶつちやけていえば12月8日までに完全には準備できてなかつたのでは？」

「まあ今の飛行機のままでも来年までは大丈夫でしょう」

「…」

次回は真珠湾を攻撃するシーンです
こんな小説ですがお楽しみください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6728h/>

大東亜決戦

2010年10月10日22時43分発行